静岡大学付属図書館

図書館通信 —1—

1970.1

創刊にあたって

付属図書館長　天野佳人

このたび，「静岡大学付属図書館通信」が発刊の運びとなり，新春とともに，皆様のお手元に創刊号をおとどけいたします。これはごくささやかな営みではありますが，豊かな図書館活動をめざす私どもの前進の一歩でありますので，どうぞ拍手をもってお迎え下さるようお願いいたします。

このような通信誌の発行は，申すまでもなく，研究者と図書館側とのコミュニケーションの一助として，極めて重要なものでありまして，すでに内藤前々館長の時代に構想立案がなされたと聞いております。その後本館の新築と移転という大事業があり，館長はじめ館員の全精力がそれに傾注されましたために，発刊の実現が遅れていたものであります。ところが，本年度になりまして，兼岩前館長よりの引継ぎに基づき，館員の熱意になる案が図書館委員会にかけられ修正可決され，図書館維持費検討委員会にて予算的にもみとめられまして，ここに実現を見たのであります。

そこで，本誌の概要につきまして簡単に申しあげますと，発行者は付属図書館でありまして，大綱は図書館委員会が決定してまいります。したがって，編集には図書館委員会委員２名と図書館員３名とが当たりますが，本誌の責任は最終的には館長が負います。発行の度数につきましては，当分奇数月の隔月刊とし，年６回にいたしたいと考えております。

本誌に掲載される内容には，(1)報告（委員会報告等）　(2)統計（閲覧統計，蔵書統計等）　(3)規則・内規（館則，利用規程，貸出規程等）　(4)目録類（新着図書目録，寄贈目録，指定図書目録，推薦図書目録等）　(5)ニュース記事及び解説，人事，研修等，図書館の紹介，窓口からの紹介とお願い，論説，随筆，書評等々が考えられております。なお，以上のことには，浜松・農学部両分館が含まれていることは申すまでもありません。

どうぞ，本誌が将来量的にも質的にも充実し，所期の目的が達成されますよう，皆様の御支援をお願いいたします。

なお，この機会に少しく申し述べさせて戴きますと，私は就任以来懸命の努力を重ねておりますが，本格的に取り組まねばならぬ問題や未着手の仕事が山積しております。例えば，試験期以外の平常時の夜間開館，蔵書構成の改善，リファレンス部門の新設，複写業務の充実等は早急に実現を期したい事柄であります。学長はじめ本部事務当局の一層の御理解と図書館委員会等関係委員会の委員方の絶大な御協力を得，さらには各学部の教官の皆様の御支持と御助言とを得まして，館員諸君と力を合わせ，懸案の問題を一つずつ解決し，教官の研究並びに学生の勉学の上に有効適切な運営をしてまいりたい考えであります。

以上紙数の関係で意を尽しませんが，「図書館通信」発刊の御挨拶を申しあげますとともに，併せて御協力のお願いを申しあげる次第でございます。

図書館実地視察員講評　要約

主査　京都産業大学副学長　堀　江　保　蔵

文部省では昭和40年度から，大学学術局に大学図書館視察員を設置し，大学図書館の組織運営の改善充実のため，各国公私立大学の図書館を実地に視察し，各大学の実情に即応した指導・助言にあたっている。下記は昭和44年12月10日，本学図書館視察時に行なわれた講評の要約である。提出された調書ならびに質疑応答等の記録が略されているので判りにくい点があることを付記しておく。

Ⅰ　組織と運営について

○館長の任期は2年というのが多いが，2年では何もできないから，せめて3年程度にするべきである。

○本館ではUndergraduate Lib.＋Deposit Lib.といった性格が強く出ていると思った。研究室備え付け図書，或はそこの図書室と本館との関係はどうか。実地に見る時間がなかったが，大学図書館全体としてみた場合の，最良の方法を検討してほしい。

○日本の図書館では工学部門が非常におくれているが，近く浜松分館が改築される際には，工学図書館のモデルを示してもらいたい。農学部分館は，いずれ統合を機会に廃止されるであろうが，その際具合の悪い結果にならないよう充分注意してもらいたい。

○調書にあるように，図書館維持費が全学的な方法で賄われていることや，図書購入費の20%が本館に留保されている点など高く評価したい。重要図書，バックナンバー等についても，以上のような配慮がなされたならばと思う。将来指定図書費が本省から来なくなった場合などを考えて，図書費の配分について考慮が払われている点は大変よいと思う。少ない館員でよくやっているが，質の向上と併せて人員増のことを検討してもらいたい。

Ⅱ　資料の収集と整理業務について

○旧制静岡高校の蔵書には，今日なお利用できるもの，貴重なものもあるので，再整理・配架換えを行ないたいものである。

○製本は良好で，特に地方紙の保存は大変行き届いている。貴重な資料だと思う。

Ⅲ　学術情報・レファレンスサービス

〔教　育　面〕

○指定図書は，本省予算のつく前，昭和41年から実施している点は，教育上の設備として高く評価する。書架を一瞥して自然系は別として，人文社会系の中にはどうかと思われるもの，むしろ一般開架に廻すべき性質のものが見受けられた。しかし指定図書目録は利用し易いようによく考慮されていると思った。将来も追加して学習の便をはかってもらいたい。

○基本的参考図書は版の古いものがあった。

○レファレンスが学習上，非常に重要になってきたが，特にすぐれているという大学はない。幸いここには大学出の有能な館員がいるので，今後大いに活用するよう期待する。

○閲覧方式は大変よくできている。時間延長はむつかしい問題があるが，学生が学校に親しむ一つの媒体として図書館なり時間延長なりが必要なので，将来は恒常的に延長してほしい。

〔研　究　面〕

複写，雑誌ならコンテンツサーヴィスなどであるが，これにはなにがしかの前提が必要で，例えば専門図書がどう存在し配置されているかという専門図書のあり方，雑誌ならその所蔵目録の作成が必要である。こういう前提が成立して初めて複写或はコンテンツサーヴィス，更に進んだ研究上のサーヴィス業務ができるのであるが，将来とも一層の考慮をのぞみたい。

Ⅳ　施設・設備の整備状況

頗る良好である。

総　合　所　見

第1点：近代的にキャンパスの中心点に位置をしめていて環境が大変よい。

第2点：本館だけではなく，大学全体の分館分室を含めた全図書館資料（人の問題も含め）を綜合的有機的に管理運営してゆく機関，これが大学図書館の概念であるが，そういった全学的立場からみた大学図書館の管理運営の基本的方針を確立してゆくことが必要であろうかと思う。

私のすすめたい本

「日本文学研究資料叢書」について

植松　茂

国文学の世界では毎月毎年発表される論文は実におびただしい数にのぼっている。それを万葉集とか源氏物語という一作品に限っても，その数は数十，あるいは百を下らないというものも少くなかろうと思う。大学にはいって国文学を専攻しようとする人，あるいは多少なりとも専門的な知識を得ようと思っている人々に，そういうぼう大な数の論文のなかから選択してこれをよみなさいというようなことはなかなかむつかしいことである。その上，一番困ることは読ませたいと思う論文が簡単に手にはいらないことが多いことである。単行本にまとめられているものは良いけれど，図書館にも研究室にも備えていない雑誌や研究報告に発表されたものはどうにも困るのである。ある作品についてどんな研究が進められ，どんな論文が発表されているかということは「国文学解釈と鑑賞」とか「国文学解釈と教材の研究」というような雑誌で，時々特集号を出して指針を与えているが，そういう中に示されている論文に実際に当ってみることがなかなかむつかしいのである。こういうことは多くの大学の国文学の先生たちが感じていることであろうが，今度ある程度こういう欠陥に答えるような本が出た。これが「日本文学研究資料叢書」である。

刊行に際してのことばから引用すると「本叢書は，既発表の研究論文のなかから，従来の研究に大きな意味を持っているもの，あるいは新しい可能性を開拓しているものなどから選択し，各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し，各研究分野の，基礎的，基本的な情報を，出来る限り有効的に提供することを目標とするものです」とあるが，特に単行本に再録されているものや，その可能性のあるものを避けていることにも大きな意義がみとめられる。

すでに刊行されたものは「万葉集Ⅰ」「源氏物語Ⅰ」「芭蕉」「西鶴」の四部であるが，今試みに「源氏物語Ⅰ」を見ると，与謝野晶子の「紫式部新考」以下27篇の論考に解説と源氏物語研究文献目録とがのせられている。この晶子の「紫式部新考」は近代の源氏物語研究の一つの礎石となっているものであるが，掲載されたのが，昭和3年の「太陽」という雑誌と，春秋社版「与謝野晶子選集」という入手しにくいものであるから，なかなか初学者の目にふれにくいものであった。これがこういう手にはいりやすい形になったことは甚だ喜ぶべきことであろう。以下の論文の中には図書館などで見やすいものも多少はあるが，特に目にふれにくいのは次のようなものであろう。

益田　勝実　源氏物語の荷い手「日本文学史研究」昭和26年4月

桜井　文子　源氏物語「玉鬘」分析考「精神分析」昭和27年11月

海老沢秀直　源氏物語（桐壺）の心理分析「精神分析」昭和27年7月

門前　真一　源氏物語「并びの巻」の説の展開「天理大学学報」51輯

中野　幸一　古代物語の読者の問題　早稲田大学教育学部「学術研究」12号

森岡　常夫　源氏物語3部構成説批判「文芸研究」昭和40年2月

池田　勉　源氏物語「桐壺」の作品構造をめぐって「成城大学創立10周年記念論文集」

しかも大切なことは，これら以外の比較的目にふれやすいものをもふくめて，全部の論文がある体系をもってまとめられていること，またどれもが，いわば粒選りの論文であって，甚だ充実しており，よみごたえがあるということである。初学者は，あるいはある程度進んだ研究者も，これらの論文によって，その作品の研究がどんな方向にどの程度進んでいるかを知り得るばかりでなく，作品研究の種々の方法論を教えられるであろう。そういう意味で，最初にあげた国文学に志す学徒，あるいは多少なりとも専門的な知識を得たいと願う人々にぜひ推せんしたい叢書である。

今の所第1期として前記の4冊のほか「日本の神話」「万葉集Ⅱ」「枕草子」「源氏物語Ⅱ」「平家物語」「今昔物語」「森鴎外」「自然主義文学」「夏目漱石」「石川啄木」「太宰治」の11冊が予定されているが，この事業が発展してさらに第2期第3期の刊行が行なわれることを期待したい。

なお，筆者が本学教育学部研究報告13号に発表した「憶良短歌の文体」が本叢書「万葉集Ⅰ」に収録されたが，これも発行部数の少ないものであるから，この機会に多くの学徒の目にふれることを得るのは望外の幸せである。

本叢書は付属図書館4階の開架閲覧室に配架される予定である。

（教養部　教授）

ハイゼンベルクの発言

中　山　　潔

3年程前に高名なドイツの理論物理学者ハイゼンベルクが来日し，現代物理学の諸問題や，自然科学と精神文化に関する諸問題について広範な講演を行い，聴衆に深い感銘を与えたことはまだ記憶に新しい。日本を離れる前に催されたある晩さん会の席上で，ハイゼンベルクは次のような挨拶をされた。「世界の文化史のなかに幾度か黄金時代がありました。ギリシャ哲学，ルネッサンスの美術，ドイツ音楽など……。そして今世紀の原子物理学の黄金時代のはじまりに，私はここにお集まりの方々とともに参加したのです。」何気なく聞こえる挨拶ではあるが，ハイゼンベルク自身がプラトン，ミケランジェロ，ベートーベン等と同列に名を連ねる日を予見するかのような，自信に満ちた発言である。量子力学の創始者の1人にこのような発言をされると，私は途方に暮れて考えこんでしまう。何故なら，文化史上の黄金時代の象徴にふさわしい内容の充実した量子力学の講義をする義務を負わねばならぬからである。量子力学は，原子的現象を解明する基礎となる理論体系として形成され，現在では非相対論的な微視的現象に対して矛盾なく適用できる理論体系であることが知られている。また今日私どもは，ボーアやハイゼンベルクの名と共に知られる相補性原理や不確定性原理の中に，物理学に新しい概念が生まれてきて，認識論に新しい局面を開いた事実を見出すことができる。このように考えると，ハイゼンベルクの発言が一層の重みを帯びてくる。

理学部で量子力学や原子核物理学の講義をはじめるようになってから感ずることがいろいろある。我々は知らず知らずのうちに百科全書的な物理学の記述に慣れ過ぎてしまってはいないだろうか。このような方法では，既に完成した理論体系を未解決の問題に適用して現象の由来を明らかにすることはできるようになれるかもしれないが，適用可能な力学や理論体系が全く存在しないような未知の領域の問題に対処する力は育たないのではなかろうか。特に理論物理学を研究する者として，私には後者の能力を養うことの重要性を身近に感ずるのである。このような観点からすれば，学生諸君が物理学を学ぶ際には，多くの天才たちの考え方の秘密や問題の設定の仕方に親しむことがより重要に思えてならない。そこでこのような目的に役立つと思われる著書を文末にいくつかあげて推せんしてみたいと思う。紙面の関係上ここでは量子力学に重点をおいたが，物理学全般の基礎的素養の上に立って量子力学を学ぶ態度を忘れないで欲しい。更に本の数をできるだけ少なくし，書店で入手し易いものに限定した。最後に，学生諸君が急がずに無欲に努力されて，著者の個性にふれ，その背景にある自然の「広さ・長さ・高さ・深さ」を感得されるようになれることを望みたい。そしてできればハイゼンベルクの発言の意味を物理的言語で考えてみるようになれるならば幸いである。

(1)朝永振一郎「量子力学」（みすず書房）
(2)ハイゼンベルク「量子力学の物理的基礎」「現代物理学の思想」（みすず書房）
(3)ディラク「量子力学」（みすず書房リプリント版，岩波書店訳本）
(4)ボーム「量子論」（丸善リプリント版，みすず書房訳本）
(5)ランダウ・リフシッツ「量子力学」（東京図書）　「統計物理学」（岩波書店）
(6)ボルン「現代物理学」　（みすず書房）
(7)ファイマン「ファイマン物理学」（岩波書店）
(8)ゾンマーフェルト「理論物理学講座」全6巻（講談社）

（理学部　助教授）

■ 図書館委員会報告

昭和44年12月18日
於　本　館

(1)12月8日の図書館維持費検討委員会（東部）で決定された昭和44年度東部学部等の図書館維持費分担方法の経過報告。

(2)図書購入費は各学部に細配分せず，図書館（分館を含む）に全額留め置き，委員会において，全学的な視野の下に使用することが望ましいという結論に達したが，なお最終決定は次回の委員会においておこなう。

(3)館報「図書館通信」の発行については，東部図書委員会に諮った経過報告を諒承した。

■ 東部地区図書館委員会報告

昭和44年12月12日・19日
於　本　館

(1)館報の発行を原案に基づき，検討した結果，誌名・編集委員構成・刊行頻度等に修正を施した上，18日の図書委員会に諮ることにした（12日）

(2)昭和44年度教養図書費の東部学部等の負担方法を決定した。（19日）

■ 延長開館の利用状況について

本館では試験期（44年1・2月，9月）と通常期（43年12月，44年10・11月）に延長開館をおこなった。その利用統計が下記の表である。これをみると，いかにも利用が少い。図書館の座席数584，東部学生数約3150人（教育学部生は除く）に比較すれば，その状態は歴然たるものである。延長開館には多くの諸経費を要し，また，さまざまな図書館側の努力にもかかわらず，従前よりこの低調さは一向に変らない。大いに利用してもらいたいものである。

延長開館利用統計

※印は試験期

区　分	43年12月	44年※1月	※2月	※9月	10月	11月
開館日数	9	14	16	16	7	16
開館延時間数	16	32	38	44.5	19	44
入館者数	29	263	699	954	182	424
1日平均入館者数	3.2	18.8	43.7	59.6	16	26.5
利用冊数	102	319	1,608	1,602	246	859
1日平均利用冊数	11.3	22.8	100.5	100.1	35.1	53.7

14,000冊　— 指定図書制度のゆくえ —

指定図書制度の実施によって，本館2階の指定図書閲覧室には，現在，約14,000冊の本が配架され，一般開架図書とは異なった独自の方法で，学生の閲覧に供されている。ところが一見誠に勉学するのにふさわしいこの環境と配慮にもかかわらず，見うけるところ試験期等の特別な時期以外は，書架上の図書が行儀よく人待ち顔に並んでいて，いかにも淋しげなのである。アンケートや利用統計をみても，それを裏付けるような結果が出ているところをみれば，運用・指導等について，もうひと工夫あってもよいのではないかと思われる。もっともこれには図書館側のＰＲの不足とか，指定した図書が授業に間に合わなかったとか，運用法に難点があるとか，いろいろ理由があるだろうが，やはり根本的な問題は，新制大学が単位制（1時間の講義に対し教室外の2時間の準備のための学習を必要とする）を採用していることと併せて，マス教育による教授法の変化等によっておこる諸要因と，この制度が本来は密接につながっているはずのものが，うまく結びつかないところにあるのではないだろうか。

しかし14,000冊の図書は，カリキュラムに関連あるものとして，すでに用意されているのであるから，これを基礎にした効果的な継続を，積極的に考えてもらいたいと思う。昭和43・44年度の2年度にわたって，本省から約1,000万円の指定図書購入費の配分を受けたが，それが終った今，来年度からはどのような計画でこれを補足維持してゆくかも問題である。実施当初，学習図書館としての機能の面からも，可成の成果が期待できるのではないかと思ったが，過去4年間の実施経過からみて，今ひとつの壁につき当った感がある。この間における館員のかげの努力が，なしくずしになることなく，立派に実を結んでほしいものである。

制度自体にも，利用態勢にも，いろいろ問題点はあると思うが，講義に直接関連のある学生のための図書資料費であるから，その経費の確保とか利用指導については，今後図書委員会を中心にして，全学の教官に考えていただきたいと思う。

お　知　ら　せ

○後期試験のため延長開館を行っております。

期間　1月19日（月）～2月21日（土）

時間　平　日　　17時～19時

　　土曜日　　12時～16時

○春季休業中の長期貸出。

今回は第1次申込みだけとし，指定図書の冊数制限を外しました。

申込み期限　　2月25日（水）まで

貸出冊数　　1人　　4冊以内

貸　出　日　　3月5日（木）～7日（土）

○春　季　休　館

期間　3月9日（土）～4月10日（金）大岩分室移転作業のため，3月中には教職員の入庫および図書貸出をご遠慮願うことがあります。

○教育学部の移転に伴い，大岩分室は2月28日をもって閉鎖します。

浜松分館だより

静岡大学工学部50周年記念事業会が，昨年1月発足し，50周年記念事業の一環として，昭和46年度新築を目標に今後浜松分館図書委員会を中心に資料・情報を蒐集し，同時に新しい大学図書館等の視察等を行ない，計画を進めることになりました。昨年11月10日静大附属図書館を訪づれた文部省の大学図書館実地視察団の講評の中にも，浜松分館が工学に関する専門図書館としてモデルとなるよう準備を進めて貰いたい旨の要望がありました。今後共に皆様の御理解と御協力をお願いいたします。なお新図書館の総面積は文部省の基準によると下記の通りです。

大学図書館の必要面積（建設基準積算資料）

文部省大学学術局情報図書館課主管（教育施設部計画課担当）の改訂面積基準

$1a+2b+5.3(A\times1.5-0.1a-0.16b)+300$

a…学部学生数　$455\times3=1,365$（2～4年次学生）

b…大学院々生数　$75\times2=150$

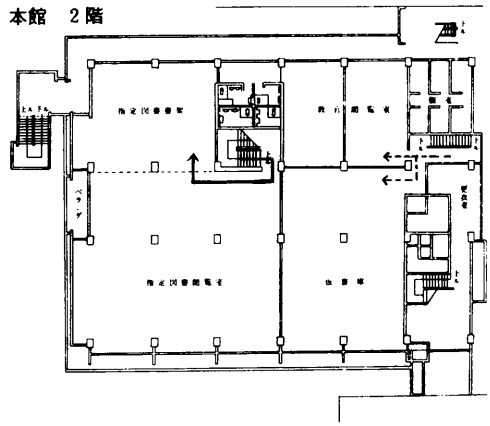
A…蔵書数（単位　千冊）　77

$1365+300+5.3(77\times1.5-136-24)+300=1965\,m^2$

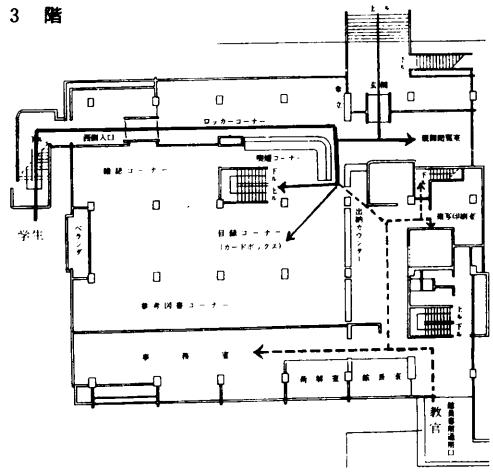
（約　595坪）

図書館案内図

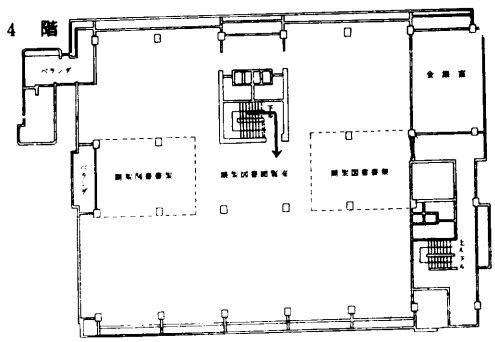
本館　2階



3　階



4　階



静岡大学附属図書館　「図書館通信」　No. 1　　1970年1月20日　発行

発行所　静岡大学附属図書館　静岡市大谷836　TEL (85) 1175

印刷所　文　化　洞　静岡市大岩北1185　TEL (45) 6260